がわかるに違いないとか、又はある一つの戯曲に、われわれに親しみのない一つの要素が現われていれば、それは今までに知られていない偉大な作家の存在をさし示すものだとか、主張するのは余計なことだ。二つの精神の融合から生れる化合物というものが、上述の二つの主張をば無効なものにしてしまう。又これによつて、たとえば Beaumont と Fletcher などの合作において、それぞれの劇作家が書いたと思われる個所を、一つ一つより別けるというようないささかやりきれない仕事から、われわれが救われることにもなるだろう」

しかしこの workshop における何よりも大きな実験は、彼等の芸術の媒体——すなわち言語という面に現われた。この点においても、Yeats の幻想は正しかつた。彼はまずジヤーナリズムによつて汚されていない言葉を求め、それをアイルランドの西部にいるゲーリック語を知つている人々の語る英語の中に見出した。しかもこれを実践によつて裏付けしたものは相も変らず Lady Gregory で、彼女は二冊の伝説集 *Cuchulain of Muirthemne* と *Gods and Fighting Men* によつて、上述の方言を文学としてどう生かすかの模範を示した。むろんこれが完全な舞台語となるためには Synge の天才を必要としたが、とにかくこれらの人々の協力によつてアイルランド新劇運動が花咲いた。こう考えるとイエーツがパリの宿舎において Synge に語つたといわれる西のはてにある Aran 島へ行つて、まだ表現されていない生活を表現せよといつた忠告が、一時の思いつきやでたらめでなく、これも深い洞察を含んだ「詩人の幻想」であつたことがわかるのである。

——山本修二

Aldous Huxley: The Doors of Perception

たしか昭和廿九年五月号か六月号かの「芸術新潮」の海外新刊紹介欄で、オルダス・ハクスリーの新著「知覚の戸」*The Doors of Perception* が挙げられ、これは著者が「メスカリン」Mescalin と云う新薬を飲んでその幻想の体験を記録した書物であると云つた意味の数行に亘る簡単な紹介記事を読んで、さてはハクスリー先生！ 廿年代の懐疑と分裂の暗闇の中に解決を求めて盛に活躍した往年の元気も衰え、近年はひたすらに凡悩障滅と正覚の光明に安住を求めようとする神秘主義に堕したと云われる先生、遂に麻酔薬中毒患者になり下つて、これはその体験をものしたものか、それとも文学的に連想すれば現代の「阿片溺愛者の告白記」が出現したのか知らんと早速一本求めて読んで見た所、豈図らんや、そこに見られるものはドゥ・

クインシーのような麻薬に依る快薬と苦痛の交つた夢幻的空想でもなければ、ブレイク流の内的光明の深遠な夢想でもないのである。それはあの短い紹介記事とそれに影響された筆者の予想外れであつた、「メスカリン」とは世に知られる阿片、モルヒネ、クロラールの様な麻酔薬でなく、現代随一の物知りハクスリー先生が御推奨なさるもの丈けに誠に変つた新薬である。その薬とはこうである。

随分古くからメキシコや、北米ではテキサスからウィスコンシン地方に住むインディアン達の間に礼拝の時、「メスカル」Mescal と云う一種のサボテンの刻んだ茎を食べる奇癖がある。このサボテンの茎は瘤状突起物に掩われ、その瘤の先はボタン状をなしその中に興奮物質(麻酔物質ではない)を含んでいて、土人達はこれをキリスト教の聖ざん式に於けるパンと酒の代りに食べると一種の法悦境に三昧することが出来る。このサボテンの持つている意識変更の特効は早くから人々に気づかれ、多くの心理学者、生理学者、神経学者、精神病学者達がこれを人間の頭脳と意識との関係、殊に精神分裂症の問題に関連して研究の対象として来ていた。所が最近「メスカリン」と呼ぶその「アルカロイド」の抽出と合成に成功した結果、これを用いて「メスカリン」飲用者の示すいろいろの症状研究が盛んに行われるようになり、遂に一九五三年の陽春現代随一の賢者ハクスリー先生が「メスカリン」研究の所謂ギニア・ピッグとなつて実験台に上つたのであつた。五月の或る麗かな朝、彼は水の半分這入つたコップに「メスカリン」十分の一瓦ばかり溶かしたものをグット一息に呑みほしてどんな症状が現れるかと待つたのである。そして彼は数人の研究者に取囲まれ、側には患者の示す反応を記録するテイプコーダーがおかれてある。この新著はその際数時間に亙る患者ハクスリーが示した症状を、本人の体験とテープコーダーの捕えた記録とを基にして書かれたものである。

先に云つたように「メスカリン」は阿片やモルヒネのような麻酔剤でなく、それは飲用者を刺戟して却つて客観世界に於けるその者の視覚を拡大する。阿片やコカインのように視覚をもうろうとさせその揭句中毒を起すことなく、心臓や肺にも障らない。酒のように二日酔や交通事故を起すこともなく、亦覚醒剤ヒロポンのように暴力を発揮させることもない。それ所かこれを飲んで暫くすると心は何とも云えぬ落着きを得、意識はハッキリとして眼は済んで来て物象に依つてはその姿に今までにない異変が生じる。ハクスリーには一時間半後に部屋に在るガラスの花瓶に挿してあるバラとカーネーションと菖蒲の花の姿が異様に見え出して来る。花の輪廓の内に在る奥深いものがウラウラと大きく浮び上つて、それに関する空間と時間の観念が

除かれて花の持つ「裸の存在」Naked Existence と云つたものにぶつつかる。その時の気持は快でも不快でもない。その時の心境、否、拡大した視覚の世界を彼は 'It just is' と云い、Is-ness と云う語で呼んでいる。こう云つた体験を彼は部屋の中の書籍、家具殊に椅子に眼をやつた時にも感じる。その間に実験者達によつて車に乗せられて或る有名な薬屋（ドラグストア）に行つて、其処でいろいろの名画例えばゴッホの「椅子」や同じく彼の絵「ジュデイス」やフェルメーアの静物画やその外種々な物象に接した時も同様な視覚の世界に接する。（但しセザンヌの有名な肖像画を見た時は人間の偽装（プリテンション）の姿を見せつけられて思わず失笑したと云つている）。それから庭に出てバラ棚の下を通つてその下におかれてある椅子を見た時再び視覚拡大の世界に接し、次に「シャグマ百合」の花を見た時は殊にその葉の緑色に接した時、緑の明暗とりどりの微妙な交錯によつて展開する緑の深淵の神秘の世界の内に、子規のバラの句と同一の世界を見たと述べている。こう云つた数時間に亙つて彼が接したいろいろの物象から得た視覚拡大の体験を詳細に記述しているのであるが、この「メスカリン」視覚を著者は All knowledge, Mind at Large, Istigkeit (Is-ness), Dharma-Body of the Buddha, Suchness, the Void, the Godhead などの言葉で呼んでいる。そして彼がここに色々と記述している「メスカリン」体験を要約して見ると次の様になる。

(一) その薬を飲んだからと云つて決して記憶力や物象を直視する力が減退することはない。

(二) 視覚像が著しく強化される。即ち人間の眼は、感覚（センス）が未だ概念（イーション）に影響されない幼年時代の純な知覚力を恢復する。同時に時間と空間に関する興味が殆んど消失する、その適例はワーズワースの短詩「水仙（ダフォディル）」の境地であると著者は云つている。

(三) 「メスカリン」飲用者がこう云つた時空の観念を超越した一種特別な視覚を得ると、自分の精神がだんだん向上するように感じられて世の常の行動に向う意欲がなくなる。

(四) 外部に対して人間の行動や製作物はものに依つて悉く偽装（プレテンション）や虚構（フィクション）に見えて来る。また自分の心の内は結局人間の偽装を象徴するいろいろな概念（イーション）に充ちていることが分つて来る。

(五) この清浄な知覚はいわば神の世界の片隣を垣間見せて呉れるので、人間界の汚わしい快楽や権力欲など一切の五欲の誘惑に負けないようになる。

(六) こう云つた清浄な光明に接すると、人は神の栄光に接する時に体験する宗教的戦慄に似た恐怖を感じる。これは人間自身の狭い有限の世界と神の広大無限との相容れない衝撃から生れた恐怖心であつて、その際普通人はその神々しい白光に眼を向け得ないで自我の暗闇の世界に眺れるのであるが、それをな

し得ないものが精神分裂症を呈するのであると著者は云う。普通人にとつては、この絶えず眺れようとする眼を白光に向ける為に必要なものは、白光と云うも本質的には自己の内心の光と変らないと云つた自覚を得るための自他の鞭撻精進の言動であつて、宗教的儀式も亦そう云う役目を果す最善の方便の一つであると云う。

然らば何故このようにハクスレイが「メスカリン」飲用に依る人間の意識の変化とその功徳を説いているのだろうか。彼に依れば、単調と苦悩に充ちた住み難いこの世を避け、その中で育まれた諸々の自我意識から蟬脱しようとするのは人間の持つ主要な欲望であつて、そのために芸術と宗教が利用されると云つている。こう云う考は一九三六年に出した彼の評論集「オリーヴの木」中の一篇「作者と読者」にも見られ、人間は貧困と社会的無力と性的不満に充ちたこの殺風景な現実から逃れて文学作品のいろいろの人物の内に自己に似た姿を認め、これ等を真似たりこれ等に自己を投射することに依つて現実世界に於て充たされない自己の欲望を実現する傾向を指摘し、これを「ボヴァリズム」と名づけている。それから人間は教会へ出かけて祈つたり、説教を聴いて現世の苦悩を忘れようとする。その外いろいろの修養の道に精進する。これ等の方便に失敗すると、人間は酒や阿片やその外化学的麻酔薬に走つて我を忘れようとする。こう云つた芸術、宗教、アルコール、阿片、クロラール、アンフェタミンなどの自我解放手段を著者は、H・G・ウエルズの短篇小説「壁の戸」*The Door in the Wall* (1911) に因んで「知覚の戸」と名づけ、その一つとして「メスカリン」を推奨するのである。「壁の戸」とは、幼時一度その戸から這入つた美しい楽園を忘れ得ず、再遊の憧れとその戸の幻影に憑かれた男の話であるが、「メスカリン」は正に明知の楽園へ人を導く入口である所の「壁の戸」即ち「知覚の戸」である。

著者が「メスカリン」体験を尊重する第二の理由はこうである。人間が古人の経験に接することが出来るのは言語のお蔭であるが、同時に人間は言語の犠牲者でもある。人間は、著者の所謂 All Knowledge, The Mind, Suchness に絶えず取囲まれ、それは人間の頭脳と神経組織と云う漏斗を通してポツリポツリと人間各自の意識となつて滴下する。この人間の意識である所の各自の限定意識 reduced Mind or awareness を現すのに人間は共通な象徴手段即ち言語を以てする。だから人間は厳重に云つて相互に理解と感情の共通地盤を持つていないで、只推理的理解（インファレンシャル）と推理的同情とをやつている。のみならず現代の知識人は、そう云う限定的な言葉とそれに依つて現される概念（ノーション）を重んじ過ぎて、眼に直接訴える知覚を疎んじる傾向が強いと著者は云う。だから現代の教育は言語的（バーバリ）に行われて、経験の第

一事実としての自然が忘れられている。自然とか真実と云つたものは吾々の推理を絶したもので、それは直接に全体的に把握されねばならない。だから教育に必要なものは、言語的人文学（ハーバル・ヒユマニテイス）を教えると同時に非言語的人文学（ノン・バーバル・ヒユマニテイス）、即ち吾々の具体的経験事実を直視する術を教えなければならぬ。そして言語的知覚（バーバル・パーセプション）若しくは系統的推理（システマテイク・リイズニング）のためのみならず吾々の存在する内的並に外的世界の全体的理解若しくは直接的知覚を得るためには、この「メスカリン」が最も重要な手段の一つであるとハクスリーは云つている。

此処で筆者の気になるものは、前述「メスカリン」飲用体験要約の㈢で云つた日常生活に於ける行動欲の減退と云うことである。即ち「メスカリン」体験に関して最も大切な問題は、明知と活動との関係、観照と行為との関係である。即ちそう云つた全体的直接的知覚と云うものは却つて現実世界の行動意欲を阻害する危険はないだろうかと云うことである。ハクスリーは内心この危険を感じていた為か、彼の推奨する「メスカリン」体験がそんなものに誤解されることを恐れてか、この体験で得られるものは完全到達の明光ではない。普通の観照、例えばプラトン哲学の理念のような抽象的理想でもなければ、詩、絵画、音楽に於ける自我陶酔でもない。成程そう云つた完全な観照は行為と相容れないだろう。併し「メスカリン」体験はそんな完全な明光、法悦、至福そのものでなくて、それは完全明光が啓示的（アポカリプチカリ）に示現する過程であり、完全明光の一歩手前而かもそれを獲得するに役立つものである。それは天地に遍在して、かつ現れかつ消ゆ態の、断片的に示現するカトリシズムの所謂 gratuitous grace に似たものであると、これ切りに弁明しているが果してそうであろうか。そこから筆者の危惧する危険が生れなければ幸である。と云うのはハクスレイは、本書の「メスカリン」的知覚論からも察しられる如く、従来、人間の全体性の観点から現代の政治、経済、社会を分析解剖してその弊害を指摘批判した彼の悲観的人生観のうちに吾々は一種のニヒリズムを感じるのであるが、このニヒリズムの基調をなすものは彼の無執着（ノン・アタッチメント）の哲学である。そこから彼の消極主義が生れるのであるが、どうもこの無執着観は、本書その他で彼が近来口やかましく説いている全体的知覚と運命的に密接な関係を持つて益益彼の無行動性に拍車をかけているように思われるからである。尚この全体的知覚の問題は近刊「人文誌」に於て詳論しておいたから参照され度い。

——中野正順